

内水面養殖について

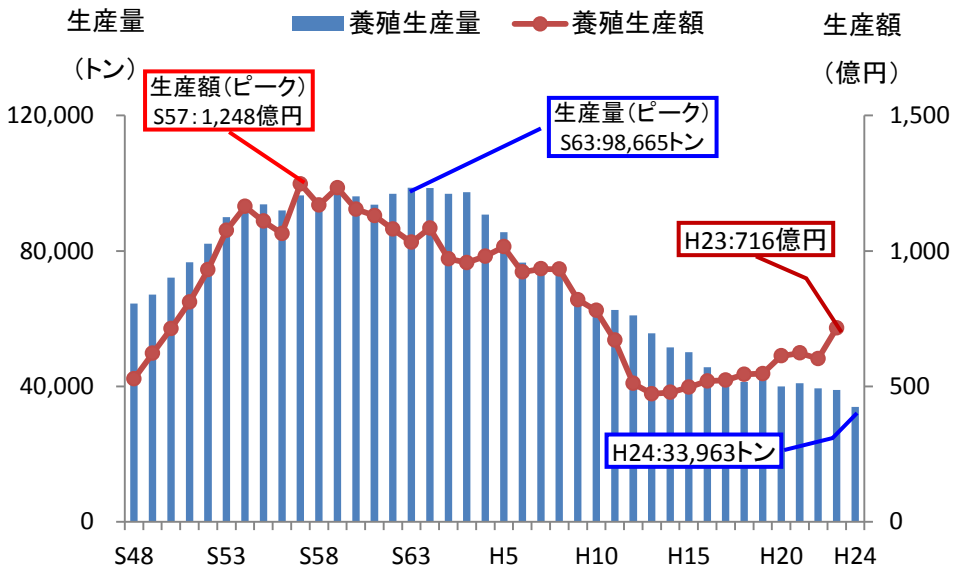
平成25年6月

水産庁

内水面養殖業の動向

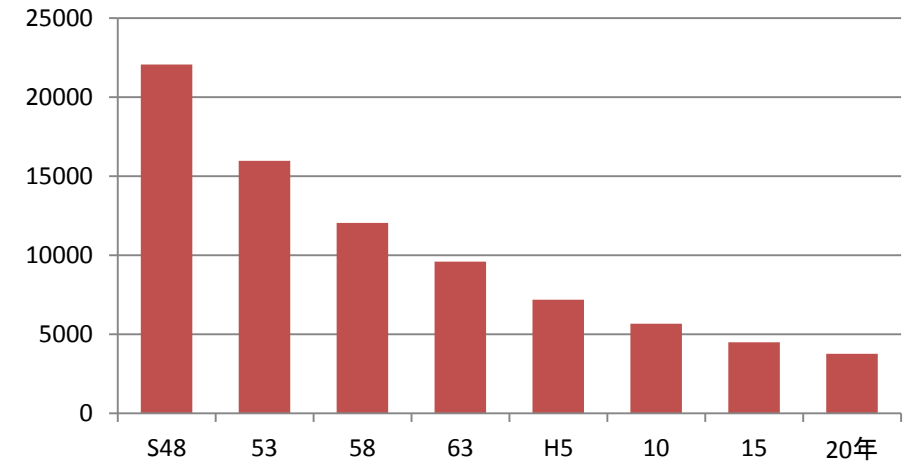
- 内水面では、ウナギ、マス、コイ、フナ、アユなどを養殖
- 内水面養殖業生産量は、近年減少傾向にあり、平成24年は約3万4千トン。一方、生産額は、ウナギ価格の上昇により増加傾向にあり、平成23年は716億円
- 内水面養殖経営体数は減少傾向

内水面養殖生産量・生産額の推移



資料：農林水産省「海面漁業生産統計調査」

経営体数の推移

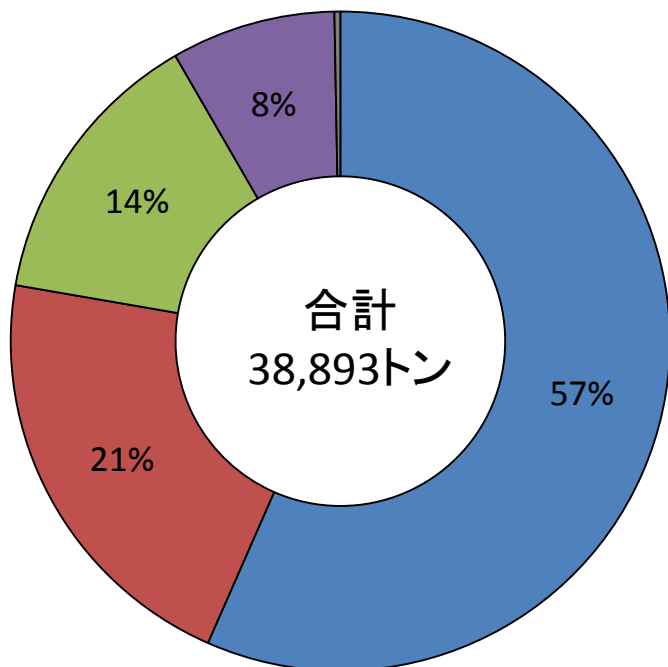


資料：農林水産省「漁業センサス」

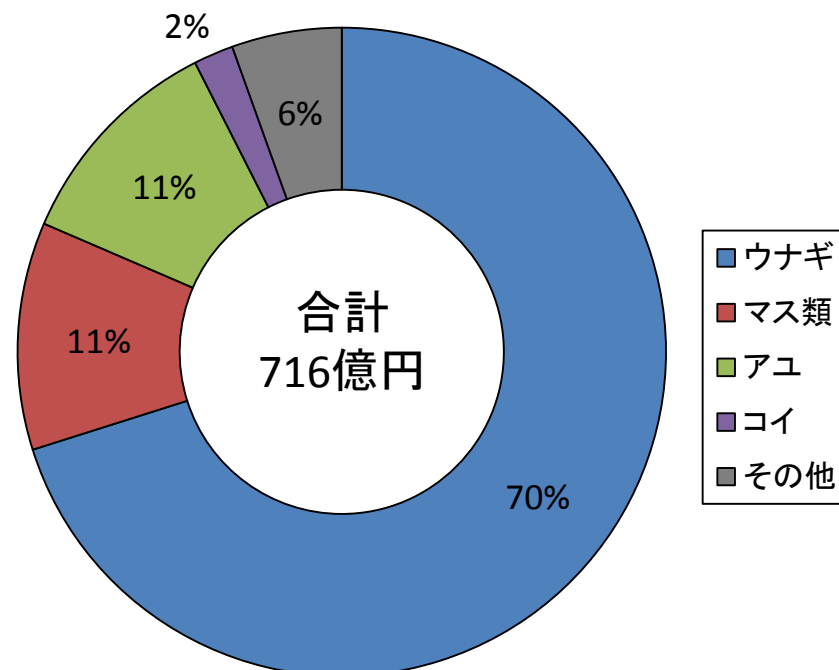
内水面養殖生産量及び生産額について

- 平成23年における内水面養殖生産量は約3万8千トン、生産額は716億円
- 主な養殖対象種はウナギであり、その割合は生産量で約6割、生産額で約7割

■内水面養殖生産量(H23年)



■内水面養殖生産額(H23年)



出典: 漁業・養殖業生産統計年報

養鰻業をめぐる状況

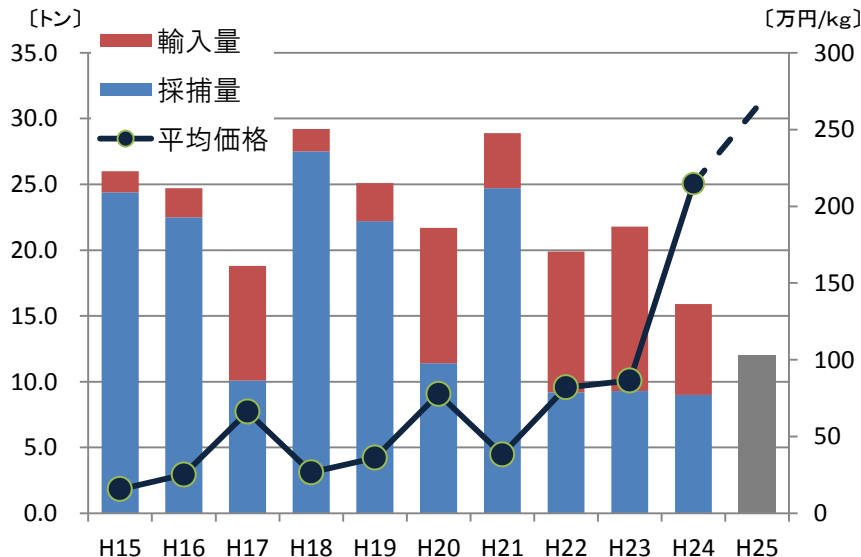
①ウナギの種苗

- ウナギ稚魚の国内採捕量は年変動が大きく、不足分は、輸入で補う形
- 国内での採捕は、近年不漁が続いており、取引価格が上昇。種苗の安定確保が課題

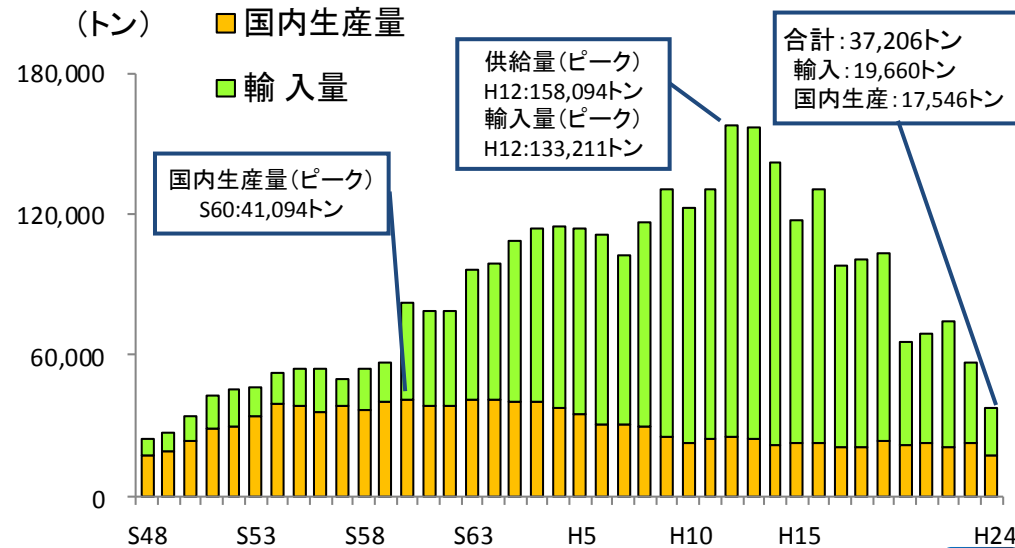
②ウナギの国内供給量の推移について

- ウナギの国内供給量は、平成12年の約15万8千トンにピークに減少傾向
- このうち、国内生産量は、昭和54年から平成4年まで約4万トンで推移していたが、その後減少し、近年は約2万トンで推移
- 輸入量(主に中国)は、昭和60年から増加し、平成12年に約13万トンに。しかしながら、中国における養殖用種苗(ヨーロッパウナギ)の資源の減少に加え、東アジア全体での養殖用種苗(ニホンウナギ)の不漁の影響を受け、減少傾向が続く

国内におけるウナギ稚魚の池入れ量と取引価格の推移



ウナギの国内供給量の推移



資料：農林水産省「海面漁業生産統計調査」、「財務貿易統計」
注：調整品は原料換算している(調整品÷0.6)。

内水面養殖の課題と対応

背景と課題

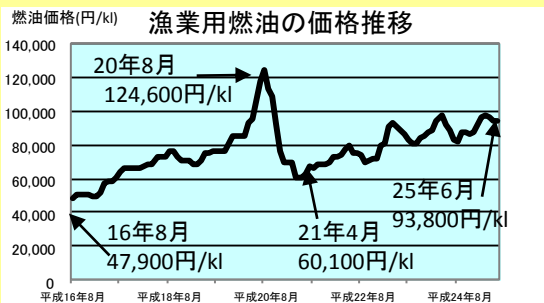
- 一般的に配合飼料を使用しており、飼料価格の変動により養殖経営が影響を受ける
- 特にウナギは近年、シラスウナギの採捕数量が低位で価格が高騰しており、種苗にかかる経費が増大
- 陸上での養殖であるため、赤潮や荒天等の影響は受けない一方、カワウによる捕食被害を受けるケースもあり

配合飼料対策について

漁業用燃油・養殖用配合飼料の価格の変動に備えた経営安定対策

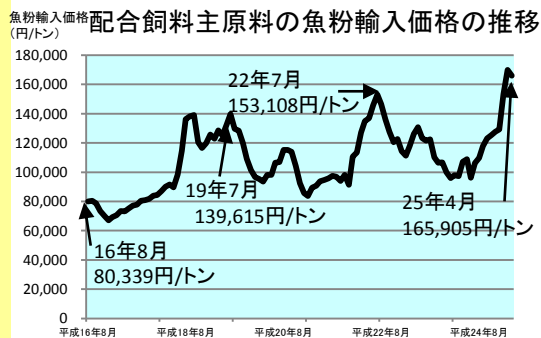
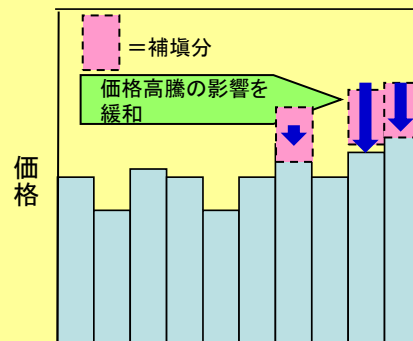
漁業経営セーフティネット構築事業
 【平成24年度補正予算額 3,910百万円】
 【平成25年度当初予算額 3,500百万円】

漁業者・養殖業者と国の拠出により、燃油価格や配合飼料価格が高騰したときに補填金を交付し、経営の安定を図ります。



○ 燃油価格や配合飼料価格の高騰に備えて、**漁業者と国又は養殖業者と国が資金を積立てます。**

・ 燃油については原油価格、配合飼料については輸入原料価格が一定の基準を超えて上昇した場合に、漁業者や養殖業者に対し、補填金が支払われます。



【補填基準】

7中5平均値

(直前7年間の価格のうち、高値1年分と低値1年分を除いた5年分の平均値)

* 配合飼料については、輸入原料価格の上昇幅と製品価格の上昇幅の小さい方が補填額になります。

○ 補填金の内訳は、漁業者・養殖業者の積立て分と国の積立て分の割合が1対1となります。

燃油や配合飼料価格の高騰が長期間続いても安心だね！



燃油や配合飼料がまた値上がりしたらどうしよう。不安だな。

ウナギ対策について

- 昨年6月に、ウナギの資源管理対策や、放流の推進、シラスウナギの大量生産技術の確立を含む調査・研究の強化等を内容とする「ウナギ緊急対策」を公表
- 平成25年度においても、「ウナギ緊急対策」に基づく各種取組を着実に実施

①ウナギの資源管理対策

養鰻業やシラスウナギ漁が盛んな11県に水産庁担当者を派遣して資源管理に係る話し合いを促進し、各県の漁業実態等を踏まえながら、産卵に向かう親ウナギ(下リウナギ)の漁獲抑制やシラスウナギの遡上確保の手法を検討。

②ウナギの放流



養鰻業者が行うウナギの放流について支援を行うとともに、平成25年度新規予算で、通常の飼育では育成が難しいメスの放流親ウナギの育成試験を実施。

③ 人工種苗生産技術の開発



(独)水産総合研究センター作成

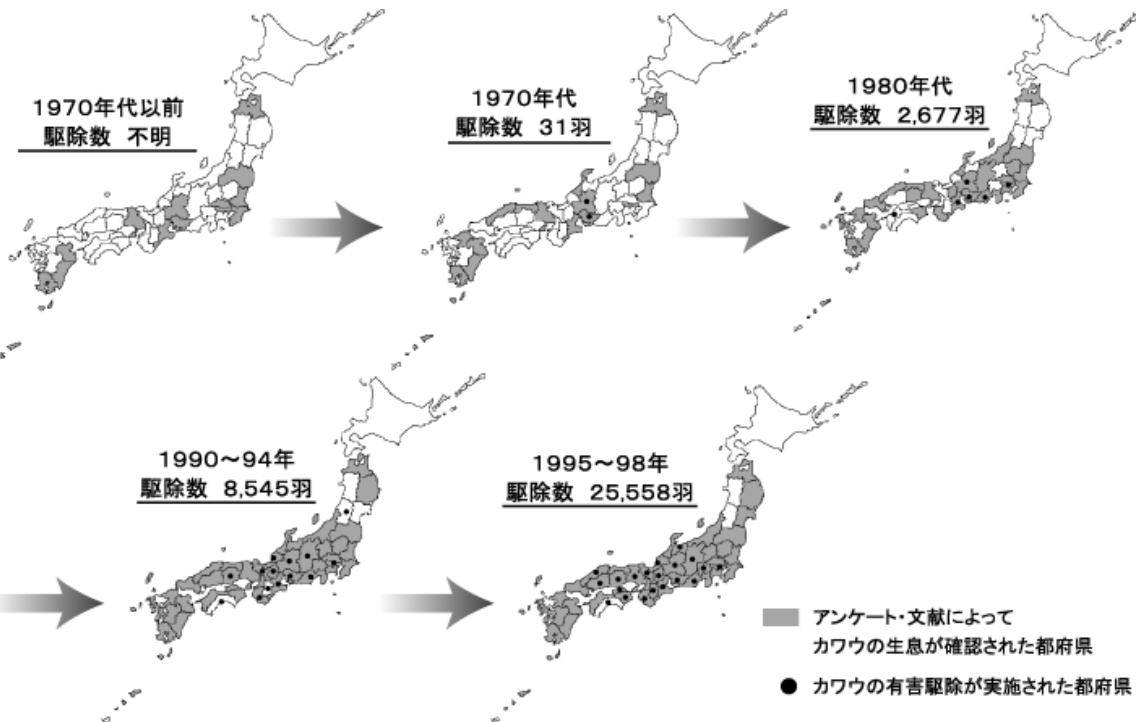
- ・水産総合研究センターでは、2002年に卵から人工シラスウナギまでの飼育に成功し、さらに2010年には、人工親魚から得た卵をふ化させて「完全養殖」に成功。
- ・2020年に完全養殖の商業化を目標として、さらなる技術開発を実施。

カワウ対策について

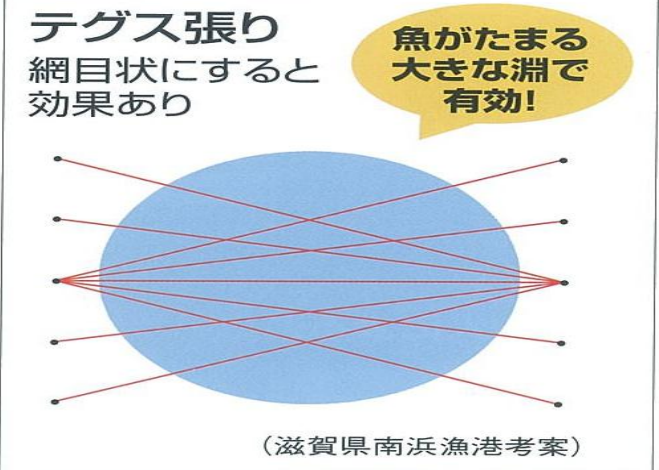


- 近年のカワウの生息数は7～9万羽と推定され、河川等に群来し、放流稚アユ、養殖コイ等を大量に捕食するなどの被害が発生
- カワウの生息状況調査や追い払い、捕獲活動及びカワウの個体数管理に係る取組につき、健全な内水面生態系復元等推進事業により支援
- 平成25年度においても、同事業により引き続き支援（予算額：161百万円の内数）

①カワウの分布拡大



②養殖場でのカワウ対策



・養魚場でカワウの侵入を防ぐためには、テグスを30cmより狭い感覚で張ることが効果的であること等について、冊子を作成し周知を実施。